

# いのち 生命のにぎわいとつながり

No. 74

令和4年7月

アメリカザリガニとアカミミガメは、人間の生活に身近な外来種の代表格と言っても良いでしょう。アメリカザリガニは1920年代以降、アカミミガメは1950年代以降にそれぞれ日本に持ち込まれ、幅広い野外環境に拡散し、在来生態系に大きな影響を与えています。彼らは一体、どんな生き物なのでしょうか。そして、今後私たち人間は、彼らとどのように向き合っていくことになるのでしょうか。今回の巻頭特集が、皆様のご理解の一助となれば幸いです。

## 特定外来生物への指定が予定されている身近な外来種 ～アメリカザリガニとアカミミガメ～



図1. アメリカザリガニとアカミミガメ (写真左上の数字は、撮影者の生命のにぎわい調査団員ID)

私たちの身近に暮らす2種の外来種アメリカザリガニ*Procambarus clarkii*とアカミミガメ*Trachemys scripta*は生態系等に与える影響が明らかにされていながら、長らく特定外来生物への指定がされていませんでした。しかし、この5月に外来生物法の一部を改正する法律が成立・公布され、特定外来生物への指定に向けた準備が進められています。今号では、アメリカザリガニとアカミミガメの生態や生態系等に与える影響等について紹介します。

## CONTENTS

- 1 特定外来生物への指定が予定されている身近な外来種 ～アメリカザリガニとアカミミガメ～ ..... 1
- 2 生命のにぎわい調査フォーラムを開催しました ..... 3
- 3 企業と生物多様性セミナーを開催しました ..... 3
- 4 房総のヒメコマツ観察会を開催しました ..... 4
- 5 千葉県の希少種 (ヒガシニホントカゲ) ..... 4

### ◎アメリカザリガニによる生態系等への影響

北アメリカ原産のアメリカザリガニは、平野部を中心に、日本全国の河川、池や水田等に定着しています。多種多様な水草や水生動物（トンボ類、ゲンゴロウ類やサンショウウオ類等）を捕食するため、生物多様性に大きな悪影響を与えていることが分かっています。また、餌となる水生動物をつかまえやすくするために隠れ家となる水草を刈って開放的な環境を創出するとの報告もあり、水草を消滅させ、濁った池に改変する等の影響も指摘されています。また、病原菌を媒介することで、在来種であるニホンザリガニの大量死を引き起こす恐れや、さらに、水田内や畔に巣穴を掘ることで漏水や畔の崩壊を引き起こしたり、イネを食害するなど農業への影響が指摘されています。

### ◎アカミミガメによる生態系等への影響

アカミミガメは平野部を中心に日本全国の河川やため池等に分布を拡大し、個体数を増加させています。ハスなどを食害する農業被害、病原菌を媒介する人への健康被害、水草、昆虫、甲殻類や魚類等の在来の動植物を捕食し、在来カメ類（ニホンイシガメ等）と競合するなど生物多様性への影響が明らかになり、各地で防除が進められてきました。

アカミミガメが各地に分布拡大し個体数を激増させた原因として、原産地の北アメリカと異なり、ワニ類等の捕食者や競合する他のカメ類が少ないことがあげられます。また、在来種と比べて成熟が早く、一度に産卵する卵の数が多いことも、原因と考えられています。



図2. アカミミガメの体色変化 (A: 幼体, B: メス成体, C: オス成体) とニホンイシガメ (D: メス成体)

日本に定着しているのは亜種ミシシippアカミミガメ *Trachemys scripta elegans* ですが、成長に伴い見た目が劇的に変化することも対策を困難にさせる要因です。幼体は綺麗な緑色をしていますが、成長すると地味な体色へと変化するため、アカミミガ

メだと気が付かないこともあります。中でも、大きく成長したオスの中には、体が黒化し、頭部の赤い部分が消えて在来種のニホンイシガメに酷似する個体も見られます (図2)。

### ◎特定外来生物への指定に向けた課題

アメリカザリガニとアカミミガメは既に広く飼育されており、現行法の規制（飼養等、輸入、譲渡し等及び放出等の禁止）を適用すると、飼育個体が大量に野外へと放出され、生態系等への深刻な被害が拡大する恐れがあることから、これまで特定外来生物の指定が見送られてきました。今回の法改正では、今後新たに特定外来生物へと指定される種（上記2種等を想定）については、輸入、販売、野外への放出等を禁止にする一方で、種ごとに「個人の販売目的でない飼育」や「個人間の無償譲渡等」の一部を適用除外にできる規制手法が盛り込まれました。なお、今後新たに指定される特定外来生物や具体的な規制内容等は、改めて政令で定められます。

### ◎皆さまへのお願い

今後、アメリカザリガニやアカミミガメが特定外来生物へと指定されたとしても、学校や家庭等で飼育されている個体はそのまま飼いつけることができますので、最後まで責任をもって飼育し、絶対に野外へと放さないようお願いします。

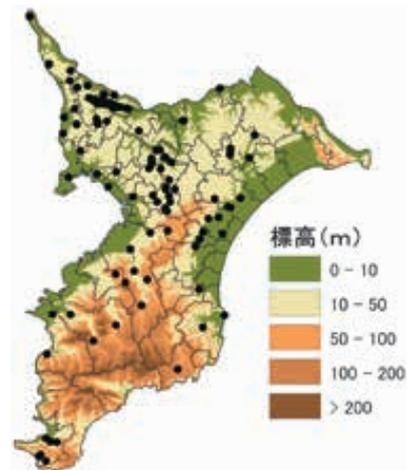


図3. アカミミガメの分布  
生命のにぎわい調査団に報告された情報に筆者が野外調査（県全域を対象）で収集したものを加えて図を作成しました。

また、当センターでは、<sup>いのち</sup>生命のにぎわい調査団という県民参加型の生物多様性モニタリング事業を展開しており、野生生物の発見報告に関する情報を収集・発信しています (図3)。千葉県内の野外でアメリカザリガニやアカミミガメを見つけた際は、是非ともご報告ください。

(加賀山 翔一 千葉県生物多様性センター)

## 生命のにぎわい調査フォーラム を開催しました

生命のにぎわい調査団は令和4年3月末で設立から13年8ヶ月が経過し、団員数が1,618名、報告件数は130,000件を超えました。

令和4年3月5日(土)に中央博物館講堂で調査フォーラムを開催し、43名(団員37名、職員6名)が参加して、千葉県の生き物について情報交換しました。過去2年は新型コロナウイルス感染防止のためフォーラムを開催できませんでしたが、改めて参加者の熱意を強く感じられました。

### 1 講演「生命のにぎわい調査団の生き物報告データから探る外来種の生態と防除対策への応用」

生物多様性センター 加賀山 翔一

団員からの生き物報告によって得られたデータから、外来種の分布や年間活動の解析結果を報告するとともに、リュウキュウベニイトトンボの団員による早期発見例を紹介し、生き物報告の有用性を示しました。

### 2 団員からの貴重な情報提供や観察事例の紹介

- ・「市原市養老川の鳥類の観察報告  
ー下流から河口までー」 嶋 徹
- ・「サギ達の生態と楽しい観察」 高見 等
- ・「森と海と街をつなぐ」 山本 博志・岡部 雅子

### 3 令和3年度写真コンテストの審査発表

フォーラム参加者の投票により、応募41作品から最優秀賞と優秀賞を決定しました。これらの作品は、今後センターの年報の表紙などに使わせていただきます。また、今回は生物多様性センター賞も設けました。応募作品は中央博物館で3月8日(火)～5月8日(日)に展示。さらに県立青葉の森公園・森のギャラリーで6月14日(火)～7月3日(日)に展示されました。

### 4 公演「詩人・大島健夫が詠む生物写真」

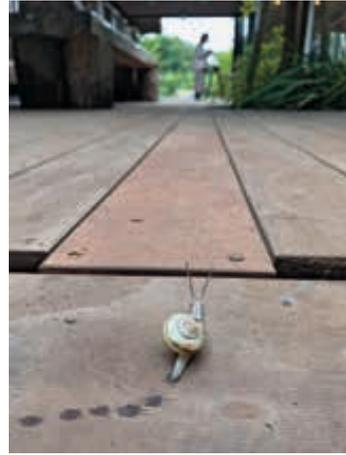
生物多様性センター 大島 健夫

ポエトリー・スラムW杯日本代表詩人でもある大島が、受賞作品に詩を添え、一番のお気に入り写真に「大島賞」を捧げました。

(大木 淳一 千葉県立中央博物館)



★最優秀賞★ アレチウリの花にキイロスズメバチ  
和田 信裕さん



★優秀賞★ カタツムリの点々  
幸 香代子さん



左・★生物多様性センター賞★ たらこ唇のカラス  
鈴木 弘行さん

右・★大島賞★ カシナガキクイムシのオスとメス  
バランス21 (グループ団員)

## 企業と生物多様性セミナー を開催しました

令和4年2月18日(金)に第24回企業と生物多様性セミナーをオンライン形式で開催しました。

今回は東京都市大学・田中章教授から「企業SDGsにおける生物多様性保全の可能性ー経済手法、里山バンクー」と題して、ノーネットロス政策、地域循環共生圏、グリーンインフラなど、企業の生物多様性保全参加の機会について講演いただきました。

生物多様性ちば企業ネットワーク参加企業からは、「2030年に向けた生物多様性活動のポイント」と題し、株式会社エコロジーパスの北澤哲弥氏が、田中教授の講演の内容を受けて、具体的な企業活動のポイントについて報告されました。

千葉県からの報告として「生物多様性ちば企業ネットワークによる里山モニタリング調査」と題し、当センターの大島健夫から千葉市谷当町で実施している調査について報告し、下草刈りによる植生回復の重要性を指摘しました。

今回、オンライン開催ということもあり67名の参加者があり、多くの企業や自治体の皆様が聴講されました。過去2年間、新型コロナウイルスの影響で開催できなかったのですが、質疑応答が活発に行わ

れ、生物多様性について関心の高さをうかがえるセミナーでした。

(大木 淳一 千葉県立中央博物館)

## 房総のヒメコマツ観察会 を開催しました

ヒメコマツはゴヨウマツというマツの仲間で、名前のとおり葉が5つに分かれていることが特徴です。房総半島のヒメコマツは、約1万年前まで続いた氷河期の生き残りであると考えられており、他の地域と比べて低標高で温暖な地域に分布していることや、近隣のヒメコマツの生育地から地理的に孤立していることなどから、学術的に重要な集団として注目されてきました。しかし、近年は松枯れ病や風水害によって数を減らしており、現在では房総半島の野生のヒメコマツは70本程度になっています。

そのような状況で房総半島のヒメコマツがどのように生育しているのかを知っていただくため、令和4年3月6日(日)に君津市豊英<sup>とよひな</sup>でヒメコマツの観察会を開催しました。当日は県立中央博物館の尾崎煙雄氏に現地の案内と解説をしていただきました。

山道の入口から登ること10分ほどで最初のヒメコマツが現れました。この株は他の植物がほとんど生えていない切り立った崖に根付いており、厳しい環境で生き伸びるヒメコマツのたくましさを目の当たりにしました。尾根沿いまで登ると見晴らしがよく、遠くには立ち枯れしたまま残っているヒメコマツも見られました。さらに進むと、崖際に立派なヒメコマツの成木があり、落ちていた松ぼっくりや種も観察することができました。この種から新たな株が育っていくことを期待したいところです。

往復3時間ほどの登山でなかなかハードな行程でしたが、房総のヒメコマツの生き様を見ることができ、有意義な観察会になったかと思えます。

(村井 貴幸 千葉県生物多様性センター)



図. ヒメコマツ成木 (左)、松ぼっくり (右上)、種 (右下)

## 千葉県の希少種

### ヒガシニホントカゲ



(千葉県レッドリスト・重要保護生物B)

庭先や道端等で青い尾を持つツルツルしたようなトカゲを見たことがある方も多いのではないのでしょうか。それはきっと、ヒガシニホントカゲの幼体です。ヒガシニホントカゲは、幼体の間は美しい青色の尾を持ち、黒地の背中に明るい褐色の縦線が入っていますが、成長とともに体全体が褐色へと劇的に変化します。特にオスは、繁殖期になると喉元から腹側にかけてオレンジ色に染まり、まるで別種のようにも見えてしまいます。

ところで、今までニホントカゲと呼んでいたトカゲになぜ“ヒガシ”と付いているのか不思議に思った方もいるかもしれません。実は、これまで日本列島に広く分布するニホントカゲは単一種であると考えられてきましたが、2010年代に入ってから、ニホントカゲ(近畿地方以南の本州、四国、九州や周辺島嶼に分布)とヒガシニホントカゲ(伊豆半島を除く近畿地方以東の本州、北海道や周辺島嶼に分布)が別種であることが分かり、2種に分けられたからなのです。

ヒガシニホントカゲは平地から山地の草むら、石垣、山林や人家周辺等の幅広い環境に生息しており、日当たりのよい斜面等で日光浴を行う姿を観察できます。これまで、県内のほぼ全域で確認されるほど身近な存在でしたが、各地で生じる開発行為等によって生息地が減少し、年々目撃頻度が低下しています。現在、2019年改訂版の千葉県レッドリストでは重要保護生物(ランクB)に指定されており、いつの間にか絶滅危惧種へと仲間入りしてしまいました。

ヒガシニホントカゲのように、身近にいたはずの普通種が、気付いたときには絶滅危惧種になっていた、といった悔しいことが起こらないよう、常日頃より身近な生き物にも目を向け、生息状況の変化を察知できるようにしていきたいですね。

(加賀山 翔一 千葉県生物多様性センター)



生物多様性ちばニュースレター No74 令和4年7月31日発行

編集・発行 千葉県生物多様性センター(環境生活部自然保護課)

〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2(千葉県立中央博物館内)

TEL 043(265)3601 FAX 043(265)3615 URL <https://www.bdcchiba.jp>

